



2020.1.15

Vol. 61

北海道サケ ネットワーク Newsletter

発行 阿部周一
事務局 木村義一 札幌サケ協議会
〒004-0022
札幌市厚別区厚別南7丁目 18-19
Tel/Fax: 011-894-0081
E-Mail: giichiketa@yahoo.co.jp
URL: <http://salmon-network.org/>
編集 寺島一男
E-Mail: tera2112@potato.ne.jp

新年おめでとうございます。



お知らせ

2020年度総会の開催

北海道サケネットワークの2020年度総会及び北海道サケ会議が、5月30日(土)札幌エルプラザを会場に開催を予定しています。会員の皆様には、事務局から改めてご案内をいたしますが、ぜひご参加下さいませようお願いいたします。

※会場は変更になる場合があります。

役員会・総会・北海道サケ会議等

- 役員会…12:30~13:30
総会打ち合わせ・総会提案事項の確認
- 総会…13:30~14:30
総会議事・参加団体報告等
- 北海道サケ会議…14:30~17:00
テーマ「サケの資源～いまとこれから～」
講師：浦和茂彦氏
水産研究・教育機構北海道区水産研究所
さけます資源研究部専門職員
- 交流会…17:30~19:30
参加者交流会
「山わさび」(同じビル地下1階)
会費：未定

EVENT NOW



「あさひかわサケの会」と「大雪と石狩の自然を守る会」が共催する二つのサケ行事が、11月旭川市の神楽公民館で開かれました。サケをもっと身近に感じてもらうと、この数年連続して開催しています。

市民鮭トバづくり講習会

11月10日(SUN)9:00~16:00
年ごとに人気上昇中のこの企画に、今年は38組44人が参加しました。午前と午後に分かれ、調理に先立ちサケの解剖でサケの体の構造や機能について学んだあと、トバづくりに挑戦しました。



固いサケの皮に驚き、三枚におろす難しさに苦戦をしながらも、自前のトバを手に喜色満面でした。乾燥はアイヌ記念館の手で行われました。

おいしいサケ・クッキング

11月24日(SUN)11:00~14:00
神楽公民館が企画する「お試し講座」を利用して開催。家族連れで参加する人が多く、今年は子どもを含む33名が“ちゃんちゃん焼き”とアイヌ料理“石狩汁”に舌鼓を打ちました。サケの生態や旭川におけるサケ遡上の現状も学べて、とても楽しかったとの感想が寄せられました。



information



札幌ワイルドサーモンプロジェクトが市民フォーラム2020を開催します。「サケと生きる」をテーマに、SWSP活動紹介・基調講演・パネルディスカッション・学生ポスター発表・札幌大学ウレシクラブ(劇と演舞)など、多彩な催しが行われます。

- 日時…2020年1月25日(土)
13:00~16:30
- 会場…札幌エルプラザ3Fホール
札幌市北区北8条西3丁目
- 入場…無料
定員150人(申込不要)
- 講演…基調講演①
「サケからみたアイヌ社会」
札幌大学教授 瀬川拓郎氏
基調講演②
「三陸からみたサケと人との関わり」
東大気海洋研究所教授 青山潤氏

【お問い合わせ CONTACT】
SWSP事務局(豊平川サケ科学館内)
☎011-582-7555





SERIES—第3回

サクラマスとわたしたち さけます保護水面管理事業調査 (その1)

河村 博

北海道立水産孵化場の配属先は増殖部鮭鱒(けいそん)科になりました。科長は倉橋澄雄さんで、みなで仲良くわいわいと盛り上がるのが好きな方でした。鮭鱒科の大きな業務のひとつが、当時道内で25河川余り(現在は32河川)が指定されていたサケマス保護水面の管理事業調査でした。

サケマス保護水面とは、さけますの増殖環境に適した流域(ほとんどが全域指定、一部が部分指定)の水産動植物の採捕を法律で禁止することにより、自然産卵を促し、そこから発生した稚幼魚を保護管理することで、サケマスの資源増殖を図ることを目的に指定した河川です。ここで言うサケマスとは、サクラマスが主対象になります。

保護水面の管理は、地元の漁協あるいは町村が管理委託を受けて、監視員による密漁の監視、河川環境モニタリングや産卵床調査などが行われていました。余談になりますが、就職して経験が浅い私にとって、保護水面調査で訪れた監視小屋で監視員の方々から伺う、サクラマス成魚の遡上時期と集まる場所、産卵床の造成場所と行動、他のサケ(シロザケ)やカラフトマスの河川内での動向などの話は、たいへん興味深く勉強になりました。

ところでサケマス保護水面が有効に機能しているか否か、あるいは他とくらべてどの程度であるのかを評価することは、保護水面を管理運営していくうえで極めて重要なこととなります。こうしたことを目的に

鮭鱒科では、毎年、サケマス保護水面管理事業調査が行われてきました。当時、水産孵化場にはふたつの支場、森支場(道南太平洋岸の森町)と増毛支場(道央北部日本海岸の増毛町)が配置されており、本場鮭鱒科を加えた三カ所で調査が進められ、最終的なとりまとめを鮭鱒科が行っていました。

保護水面管理事業調査は、大きく河川環境調査とサクラマスに関する生物学的調査で構成されており、調査項目として前者は水温・水質など、後者は餌環境(底生動物・流下動物・胃内容物)、幼魚の成長・生息密度、親魚の遡上・産卵床、それと魚類相調査があげられます。これに倉橋科長の提案で、サクラマスの沿岸漁獲量調査が組み込まれることになりました。この調査は水産孵化場から各支庁に月ごとのマス漁獲量(重量と尾数)を年度ごとに報告してもらう流れでした。一部、日本海沖合の漁獲量も参考資料として入手していました。こうして実際のフィールド調査が始まりました。現地で底生・流下動物の採集、投網を打ち採集魚の魚体測定、後で詳しく説

(北海道サケネットワーク顧問
・元.北海道立水産孵化場長) 明しますが河川残留型と降海型の区別など、結構労力と時間を使います。こうした作業の後、現地の宿に入り、地元の関係者にアルコールを交えて意見交換会が始まります。こうした時間は、現地の考え方や歴史などを知るうえでたいへん貴重な経験になりました。

調査を重ねていくうちになんとなく満たされない、もやもやしたものが沸き上がってきました。それは、調査方法にまだ改良の余地が残されていると感じたからです。私が大学4年のころは、ようやく我国に「生態学」が本格的に移入普及し始めたころで、いくつかの優れた生態学の教科書、それも水生生物に関するものが出てきていました。例えば、「河川の生態学(築

地書館)」や各分野のシリーズ物が整備され始め、この他にも「動物生態学(エルトン著)」の邦訳も出版されていました。こうして調査方法の見直しが始まり、全道統一した手法により、折に触れて調査に改善

が図られるようになりました

(北海道サケネットワーク顧問
・元.北海道立水産孵化場長)



連載

さげア・ラ・カルト
(その7)

「母川回帰」の不思議



「サケは生まれた川に帰る」とか「匂いで帰る」といわれます。そのことは実験例であってもだれも疑いません。

しかし、どんな場合でもかとか、例外はないのかと云われるとちょっと首をかしげてしまいます。

例えば、石狩川支流の千歳川で生まれた稚魚をトラックに積み、余市川の橋の上から放すと、3~4年後には余市川へ大量のサケが上ります。

そのサケは、アラスカ地方で育ち、太平洋を千島列島扱いに南下し、宗谷海峡を回り石狩川の河口を横切って余市川へ帰って来たものでしょう。そして、放なされた橋に行き載せられてきたトラックを探し乗ろうとしているかも知れません。

また「生まれた川の匂いで帰る」だけなら、石狩川の河口を通るときに生まれた千歳川の匂いを感じ、直接千歳川に帰ることになるはずですが、実際には余市川へ帰るので、どのように「辻褄」を合すると良いのでしょうか。

私は、渡り鳥で云われるような「天体観測説」を想像しております。もしそうなら、サケは水の中から空を眺めながら帰ってくるようになります。

更に、人工ふ化事業では、生まれた川とは別の川に放す移殖放流もしばしば行われますが、3,4年後には放流した川に大量に帰ってきます。

かつて、北海道から本州各地の川へ、大量に卵を移殖する事業が行われたことがありましたが、回帰年にはどの川も効果と見られ実績が上がりに地元で喜ばれたものでした。しかし、その親から生まれた稚魚を放した結果は、どの川もその事業の効果と見られる実績は見られませんでした。

同じようなことが、他の事例でもあります。それは、大型のサケが上る十勝川から比較的小型の上る網走川への移殖例ですが、網走川に放して4年後、その川では異例の大型サケが上ってきました。しかし、その稚魚を大事に育てて網走川へ放したのですが、回帰年になっても十勝川系らしいサケは見られませんでした。

このような例を見ておきますと、何千年もの時間で培われた生態の重みを感じます。

今は当たり前に行われる人工ふ化事業も、これらの生態を見極めて行うことの重要性をあらためて考えさせられるのです。

(G)